地理ジャーナリズムを！

千歳　壽一

「お茶大生は，勉強好きのかたまりだ」

最初に，お茶の水地理学会という，地理学科の卒業生が会員の学会があると聞いて，驚くというより呆れた．地理の勉強を，大学を卒業しても，まだ続けるという勉強熱心な人が，こんなに大勢いるとは信じられなかった．

ほぼ50年まえ，大学２年の２学期，教養学部から理学部の地理学科に進学した．その学期は，理学部としての一般教育に当てられていた．数学概論が彌永昌吉先生と矢野健太郎先生，天文学が萩原雄祐洗生，地質鉱物学が小林貞一先生と久野久先生，物理実験学が平田森三先生．授業はよくわからなかったが，休まず出席して，最低点でなんとか通過した．後から聞くと，どの先生も仰ぎ見るような大先生で，若い数学科出身の先生などに話すと「彌永先生の講義を聞かれたのですか」と羨ましがられる．内容はわからず，偉い先生とも知らなかったが，純粋科学の美しさに誘われて出席したようだ．おまけに，彌永先生はいつも咳をしながら講義されたので，正に謦咳に接した．

めでたく地理学科に進学すると，申し訳ない話であるが，興味の持てない授業が多かった．しかし，佐藤久先生の地形学と矢沢大二先生の気候学は別だった．また安芸皎一先生の資源論はすばらしかった．経済安定本部の局長で，非常勤講師で来られたのであるが，実例を基に論理的に説明される幅の広い講義で，地域づくりの思考形成の柱となった．

後に考えついたのだが，科学に引き寄せられるのは未知の世界の探究の面白さであり，技術に夢中になるのは新たな構造や実体の創造の喜びである．一部を除いて，現在の人文地理学に未知の探究や新たな創造を見いだすことは難しい．最近の人文地理学の論文や学術書といわれる文書から，感動的な理論に出会う或いは有益な知見を得ることは稀である．業界の常識＝地理の論文　では，世間さまに相手にしてもらえない．

それでは地理学は無用な学問かというと，それは誤りである．国際化時代において，内外の地誌を知らなければ，生産活動にも国際活動にも，多大な困難をきたすことはいうまでもない．迷わず地理学の原点に立ち，単なる暗記事項の羅列でない，正確で有益な情報によって構成され，地域の形成の道筋と現状を明らかにする地誌を，地理学者が積極的に世に送れば，地理学の社会的貢献は大きく，地理学者の評価は高まるに違いない．そしてさらに，“地理ジャーナリズム”に発展させることを，勉強好きで有能なお茶の水地理学会の皆様に，50年を心から祝うとともに，これを機会に，心からお願いしたい．

ちとせ・じゅいち
元本学教授
千寿計画研究室（都市計画技術士事務所）